我が国におけるバウムテスト研究の変遷と展望

佐々木直美・小川　栄一・柿木　昇治

（受付　1999年5月18日）

はじめに

パーソナリティを知る手段としての心理検査は，主にロールシャッハ・テストやTAT（Thematic Apperception Test：主題統覚検査），SCT（Sentence Completion Test：文章完成法）など，自由連想に基づいてそのヒトのイメージ（自己像）を捉えようとする投影法を用いる場合と，Y–G性格検査（矢田部ギルフォード性格検査法）やMMPI（Minnesota Multipha-sic Personality Inventory：ミネソタ多面人格目録）など質問紙法を用いる場合がある（谷口，1979）。バウムテストは投影法の一種であり，「所与の生活空間」（画面）に対する自己表現，つまり自己が置かれている生活空間にどのように対処しているかを示唆するものである（一谷・小林・津田・山下・弘田・林・国吉，1987）。ロールシャッハ・テストやTATがインクブロットや多義的情景描写などの刺激図を対象者の前に提示し，それに対する印象や理解という面から，反応を分析する対象者の言語反応に依存した検査であるのに対して，バウムテストは「実のなる木」を描き手がイメージして描くことにより，手の運筆動作を通じて，内的な自己像を画用紙に投影する非言語的な検査である（谷口，1979）。また，バウムテストはロールシャッハ・テストにくらべて，環境要因を含む心理状況をよく反映するとされる（小林・山下，1983）。

我が国では，バウムテストは教育現場や臨床現場で多く用いられているが，それにはまず，施行が簡便であるという性質によるものであると考えられる。しかしながら，簡便であるがゆえに，バウムテストを行なうに経験の足りない検査者が解釈をするため，バウムテストの結果に間違った評

定を行なってしまうことも多い。そこに着目した研究者たちが，バウムテストの施行法に関してさまざまな観点から有益な議論をしている。

目　　的

バウムテストの施行に関しては，A4 サイズの画用紙を 1 枚，4B の鉛筆，消しゴムを用意し，検査者が，「実のなる木を描いて下さい」と教示するのが標準法である。先行研究では，バウムテストをより有益な心理検査とするべく，教示や施行法などを変化させて検討を加えているものが見られる。そこで，本研究では，著者らが検索した範囲内で，バウムテストの理論的研究に主眼を置き，これまでの研究の変遷について述べる。さらに，今後の展望として，著者らが開発した新しいバウムテストの技法についても紹介しておく。

バウムテストの使用状況

児童相談所，および精神病院や家庭裁判所などの臨床現場においてバウムテストはどのくらいの比重で使用されているかについて以下に述べる。松原・江田・荒川・細谷・内田（1981）は，児童相談所におけるバウムテストの使用状況について調査している。全国の児童相談所158ヶ所にアンケートを郵送，92ヶ所から回答（回収率58.2%）が得られた。P–F スタディ，SCT 文章完成法，Y–G 性格検査，ロールシャッハ・テスト，WISC 知能検査，田中ビネー式知能検査が95%以上，バウムテストは91%が児童相談所で常備している。また心理検査選択の理由としては，①検査目的に合致している，②最も習熟している，③結果が治療に利用しやすい，④実施の容易性，⑤検査の信頼性・妥当性，⑥解釈の容易性が挙げられる。また，検査結果については重要視するとの回答は90%以上で得られている（松原・江田・荒川・細谷・内田，1982)。またさまざまな臨床現場においての使用状況については，中西（1984）が調査している。精神病院においてはロールシャッハ・テスト，WAIS 知能検査などに続き 6 番目，家庭裁判所では

SCTに次いで2番目，児童相談所ではSCT，WAISに次いで3番目，学生相談ではMMPI，ロールシャッハ・テストに次いで3番目である。このことから，バウムテストはロールシャッハ・テスト，SCT，知能検査と並んで，比較的頻繁に使用されているといえる。

また，バウムテストの適用年齢については，子どもから高齢者まで幅広く適用できるとされているが，特に子どもというのが何歳時からなのかについて，山本・武田（1976）が検討している。そこでは，「描く」ことの理解は1歳台，「木」の理解は2歳台，「木の描出」は3歳台から可能であると報告している。このことからバウムテストの有効性を考えると3歳時程度からが適当であると考えられる。

バウムテストの信頼性および妥当性

再検査法を用いた信頼性を検討している報告を以下に挙げる。仙田（1980）は，保育所に通う児童を対象に先述の標準法を用いて集団法で施行した。検査間隔は2週間で，2回目の前には，みかん狩りの話をした。2度目にみかんの木を描いた者を被影響者とし，バウムテストについては幹や葉などの様相をチェックする「バウムテスト整理表（後述）」から40項目，バウムの大きさなど16項目について調査した。その結果，1回目と2回目のバウムテストにおいてほとんどの検査項目で高い相関が認められた。

高校生を用いて信頼性・妥当性を検討した報告もある。高校生を対象に標準法を用いて集団法で施行した。検査間隔は8日間で，その間，樹木の観察実習を行なった。被検者の半数に「実のなる木を描いて下さい」との教示を2回与え，残りの半数は2回目に「生物のテストです」との教示を生物科の教師が行なった。その結果，バウムの位置，大きさ，筆法などで高い相関がみられた。しかし，2回目において1回目と異なる樹種を描いたものは70%を超え，「実のなる木を描きなさい」との教示を2度与えられた群で特に多かった。以上の点から，バウムの描画は樹種に経験の影響が表れるとしても比較的安定した描写が得られるといえる。つまり，1回目

と2回目で樹種は多くの生徒で変更が行なわれるが，樹木の特性はほぼ一貫しており，再検査信頼性は高い（青木，1976，1980)。このことから，バウムテストの信頼性は高いといえる。

バウムテストの評価方法

バウムテストの評価方法は比較的検査者の主観に頼るものが多い。実際に臨床現場では，バウムの細部にわたりチェックしていくことは困難であると思われるが，冒頭でも述べたように不用意に検査者が主観で判断を行なうことは危険を孕むことであると考えられる。以下にバウムテストの印象評定・定量的評価の先行研究を挙げ，評価方法について述べる。

同一のバウムテストに関して習熟者と対照群の印象評定における差について，山田（1978）が検討している。習熟群は臨床家10名，対照群は心理学系大学院生10名であり，8名の児童によるバウムテストを印象評定した。その結果，習熟群の評価は同等であり，対照群の評価にはばらつきがみられたと報告している。一方で，印象評定に基づく判断に信頼性や妥当性があるか，経験によって上達しうるか否かを検討した青木（1981）はMatching（同一被検者がある期間をおいて描いたバウムを同一被検者のものとして組み合わせること)，Blind analysis（精神病者の診断名をつける）を用いて検討した。その結果，全体的印象という主観的判断がある程度正しいものであることが示された。さらに，同一人物が描いた描画を組み合わせる（Matching）場合にも，描画から何らかの診断的情報を読み取る（Blind analysis）場合にも，経験によって描画を読みこなす能力が上達することが示された。また青木は，全体的印象は検査者が描画を見る時に，まず検査者に訴えてくるものであり，解釈を導いていくうえで非常に重大な鍵であると考察している。これらの報告から，印象評定はある程度は信頼できるが，あくまでも臨床経験を積んだ検査者が行なう場合であり，経験が浅い検査者の場合は印象評定に依存しないほうが良いと考えられる。しかし，経験を積めば印象評定する能力は上達するものであるといえる。

これまでバウムテストの評価方法について印象評定を挙げてきたが，定量的評価について検討した報告もなされている。石関，中村，田副(1988) は，バウムの形態的側面の評価に関して点数化を試み，その結果を印象的側面と比較，臨床的有用性を検討している。形態的側面の評定の指標は石関らが作製したチェックリストであり，全体的所見や個々の形態についての21項目について3点法により評定している。さらに問題となる指標に関しては重みづけを行なった。その結果，空間象徴でのはみ出し，太い幹，枝先や幹の開放，幹表面の傷などは，10代の青年によく見受けられたとし，これは，描画に自由に自我が表現されやすいことと同時に自我の不安定さも示していると考えられると報告している。石関らは自らが作製したチェックリストを使用しているが，石関らの報告より以前に一谷，津田（1982）はバウムテストの根や幹などの部分の細部をチェックするためのバウムテスト整理表を作製している。この整理表は，1. 全体的所見，2. 風景および付属物，3. 地平，4. 地平と木との関係，5. 幹の基部，6. 根，7. 幹，8. 枝，9. 冠，10. 果・花・葉の分析項目から成り立っており，その他の参考資料としては 1. 発達遅滞と退行，2. 運筆の動態分析，3. 樹木の発達(樹冠に対する幹の長さの比率)，4. Grunwald の空間図式，5. Wittgenstein 指数が挙げられるとしている。しかしながら，これらのチェック項目は非常に多く，実際には使用しにくいものである印象を受けるが，上述のバウムテストの経験が浅い検査者の場合は，このような整理表を用いて検討することが必要であると考えられる。なお，一谷らの作製したバウムテスト整理表の，樹木の発達（樹冠に対する幹の長さの比率)，Grunwald の空間図式については，著者らも用いて検討しており，樹冠に対する幹の長さの比率に関しては，加齢にともない樹冠に比べて幹の長さが長くなるという結果を得ている。さらに，空間図式については，加齢にともない空間使用量（紙面で使用した部分）は減少し，痴呆の程度によっても重くなればなるほど空間使用量は減少するという結果も得ている（佐々木・柿木，1998，佐々木・金河・柿木，1997)。さらに老人ホームに入所している高齢者とデ

イサービスに通所する高齢者の空間使用量に関しては，デイサービス群の方が紙面の右下部分の使用量が多いという結果を得，右下部分はGrunwaldの空間図式によると退行や遅滞，および幼児期の固着を意味することから，デイサービス群で退行や引きこもりが見られたと考察している（佐々木・柿木，1999)。このように，一谷らの作製したバウムテスト整理表を参考として使用することも有効な方法であると思われる。

バウムテストの標準法を変化させて用いた研究
――教示，施行法から――

バウムテストの標準法については先述したが，繰り返すとA4サイズの画用紙を1枚，4Bの鉛筆，消しゴムを用意し，検査者が，「実のなる木を描いて下さい」と教示するという方法である。ここでは教示や施行法などを変化させて検討している先行研究を挙げる。

教示について：まず，教示の変化により描画程度に変更がなされるかという観点からバウムテストの安定性を検討した青木（1988）の研究を挙げる。バウムテストを絵画専攻大学生群31名と一般大学生群26名に施行し，それぞれの群で教示変更群，変更なし群の2群を設けた。1群は「実のなる木」であり，2群は「植えたい木」との教示を行なった。分析項目は実，葉，地平線，根，幹の模様，幹の傷や枝の切り跡などの様相をチェックし，定量化した。その結果，大学生群は高い安定性を示した。しかし，絵画専攻生は位置・形態については大学生以上に高い安定性を示したが，診断項目については教示を変えるとバウムが大幅に変更することが明らかとなった。また，青木（1977）は予備校生，神経症者，分裂病者を対象に，バウム・イメージの多様性を測定することを試みた。1枚目は「実のなる木を1本描いて下さい」とし，2，3枚目は「前描いた絵とは違うようにして描いて下さい」と教示した。分析項目は，サイズ，位置，型，幹端処理（3枚とも変えていれば柔軟点2，1枚が異なれば1，3枚が同じなら0）とし，定量化した。その結果，予備校生，神経症者，分裂病者の順で多様性

が減少した。さらに分裂病者は描画様式が不適切なまま細部まで固定化していることが示された。このことから，1枚目の描画は「被検者―検査者」関係の中で，被検者がまず行なう自己表現であり，2枚目からは心のひだのより深部が伺えると考察している。次に，教示の変化によるバウムテストの各要素の持つ性質（変動性の高低）を検討した津田（1976）の研究について挙げる。6歳から15歳までの児童113名を被検者とし，1枚目は「木を描くこと」と教示し，2枚目は実験群のみ教示を変化させた。実験群には施行前に検査の重要性を強調し，そのつもりで描くよう教示した。分析項目は，バウムの幹の長さや幅，樹冠の長さなどの10項目とし，定量化した。さらに，全体印象の把握のためにSD法を用いて検討を加えた。その結果，統制群では大きな変化はみられないが，実験群では木全体の高さ，幹の長さ，樹冠の長さ，紙面の右方向への偏よりなどの変化がみられたとしている。このことから，言語ストレスを与えることは外界との接触の多い領域，未来性と関係のある領域や生への対決の領域へとバウムを位置づけると考察している。次に，地中にあって普段見えない根の部分を意識化して描くことにより，描画者の否定的側面，肯定的側面について多くの情報が得られるという中園（1996）の研究について挙げる。根を意識的に描くことは，①人格特性が根の部分の描画に表出される②樹木の根は，人格の否定的な側面ばかりではなく，肯定的な側面も表出される，という点で有効である。被検者は女子大生56名とし，1枚目は「1本の実のなる木を描いてください」と教示し，施行後，木からイメージや連想したことを余白に書かせた。2枚目は「今度は木の根っこを描いてください」と教示し，1枚目と同様，余白にイメージと連想を書かせた。その結果，樹木と根に対するイメージや連想にはかなり共通するものが認められたが，樹木と根にはそれぞれ特有のイメージや連想が働くことも明らかとなったとしている。このことから，樹木部分は広く開かれた「表」の世界に対する多彩なイメージや連想を展開させるのに対し，根部分は神秘で未知なる閉じた「裏」の世界のイメージや連想を引き出すと考察している。

施行法（2枚法）について：バウムテストを1度の検査で2枚施行する方法を2枚法という。一谷（1974）は2枚法の場合には「前に描いたものとは違った実のなる木を，もう一度描いてください」と教示すると述べている。次に，一谷・津田・山下・村澤（1985）による2枚法の施行の研究を挙げる。2枚を1セットにして1枚目を「木の絵を描いて下さい」と教示し，その後心理検査やインタビューを行ない，最後に「もう1枚別の木を描いて下さい」と教示した。被検者は，臨床群として非行児，登校拒否児，神経症者を対象とし，一般群として幼稚園児，小学5年生，中学2年生を対象とした。分析方法に関しては「バウムテスト整理表」に基づいて全体的所見，地平線，根などの項目を2名の評定者によりチェックし，2枚の一致度を求めた。その結果，一般群は臨床群に比べて2枚のバウムに変化が少なく，1枚だけでもかなり高い確率で安定した表現がなされていることが示された。しかし，一方の臨床群は2枚のバウムに安定性や一貫性に乏しいという結果を得た。このことから，バウムテストを臨床場面で活用していくためには，1枚だけという実施法ではあまりにも情報量が少なく，しかも防衛機制が働きやすいので望ましい実施法とはいえないと考察している。そして結論として，①被検者の心理的負担を考え，さらに情報量の必要量を考えれば，2枚描いてもらうのが妥当である，②2枚目では，両者関係の深化と安定から，被検者の真の姿が投影的に表現される，と述べている。次に三船，倉戸（1992）による2枚法の施行の研究を挙げる。専門学校生84名を対象に，「実のなる木を描いてください」と教示し，施行後，2枚目は「違う木を描いてください」と教示した。分析方法はバウムテスト整理表から10項目と Grunwald の空間使用量に関して定量的評価を行なった。その結果，1，2枚目を比較して，有意差が検出できた項目はなかったとしている。しかし，異なる木の絵を描かせる2枚法では，絵が大幅に変化するものと同じ絵が描かれるものとが表れてくるため，今後の検討を要するとしている。

施行法（枠づけ法）について：白画用紙の枠に沿って，サインペンで若

干，画用紙の枠より小さい枠をつける方法があるが，この枠づけ法についての研究を以下に挙げる。まず，バウムテストに限らず，描画法において「枠づけ」の意味や効果を挙げた中井（1974）は，「枠あり」の場合はより内面的であり，隠された欲求や志行，攻撃性，幻想，内実が表れ，「枠なし」においては外面的，防衛的，虚栄的な面が表れると述べている。さらに精神病者に施行する場合には，「枠あり」と「枠なし」をこの順番に施行することが重要であるが，「枠づけ」はそれに先立つ安定した治療関係を前提とし，患者の秘密を十分尊重した1対1の関係において行なった場合のみ有効であるとしている。この中井の「枠あり」「枠なし」の順で行なうことの有効性を森谷（1983）が検証している。また森谷は画用紙の枠に沿って枠をつけた方法だけでなく，枠の中に枠に接触しない程度の円枠を用いても検討している。被検者は，A群43名，B群40名（A群：枠あり→枠なしの2枚法，B群：枠なし→枠ありの2枚法），C群51名，D群45名（C群：丸枠あり→丸枠なしの2枚法，D群：丸枠なし→丸枠ありの2枚法），統制群27名（2枚とも枠なし用紙）とした。まず，A・B群ともに「実のなる木を描いて下さい」と教示し，2週間後に再び施行した。丸枠を使用したC・D群も施行方法は同様である。分析方法は，基本形，幹，枝，樹型，幹端，葉，大きさについての45項目を定量的に評価した。結果については，統制群は分析項目で有意差がみられなかったが，A・B群は「幹の傷や枝の切断」「幹の模様や陰影」が多く，C・D群は「用紙からのはみ出し」「地平線」が少なかったとしている。また，「枠あり」→「枠なし」の順の有効性については，「枠なし」→「枠あり」では，2枚目の「枠あり」で，描画面積が制限されるために，木の下部や付属的な表現が省略されてしまうが，「枠あり」→「枠なし」の順では，1枚目の枠の中にすべてを描き尽くそうとする傾向が強いために2枚目において省略するような傾向がみられないとしている。よって「枠あり」→「枠なし」の順で行なう方が良いと述べている。さらに，枠の意味について，後から与えられる枠は保護作用を示すというよりも，先に描かれた大きな木に圧縮的，拘束的，制限的に作用するが，初

めに「枠なし」の自由な空間に適応した後で枠を与えられても前の大きな木を圧縮しにくいと考察している。また，森谷・森・大原（1984）は，枠づけ法を用いて症例検討もしており，「枠あり」→「枠なし」の順でバウムテストを行なうことにより，治療状況に関する重要な情報を得ることが可能となり，従来のバウムテストの臨床使用範囲を拡大できると報告している。また，このような枠づけ法を含め，桜の木を描かせるバウムや模写図版で標準的な樹木を模写してもらうバウムなどの開発を後藤（1975）が行なっているが，その詳細について論文内で記述されていないため，今後の研究が望まれる。

以上のように，バウムテストの施行法について，教示の変化，2枚法の実施，枠づけ法を中心に述べてきた。特に2枚法の実施，枠づけ法はより被検者の深層を知るための有効な手法と考えられる。そこで我々は，2枚法の有用性に着眼し，白画用紙で行なう標準法で施行した後，水平線および垂線が書かれた画用紙で行なう幹・地平線誘導法を開発した。この方法について，以下に紹介する。

今後の展望
——「標準法」と「幹・地平線誘導法」の2枚法の施行に関して——

この「標準法」と「幹・地平線誘導法」の2枚法の開発は，2枚法で行なう方が情報量や被検者の真の姿の投影という点で1枚法よりも有用であるという一谷らの報告に端を発する。そもそも我々は，特に高齢者の心理特性の把握のために高齢者にも施行が簡便であるというバウムテストの有用性を高めたいと研究を進めてきた。実際に我々が高齢者にバウムテストを施行した場合でも，定量的評価も印象評定をもし得ないほど，サイズが小さくなってしまったり，与えられた画用紙に手が届く一番近い箇所に描かれてしまうことが見られた。また，痴呆の進行した老人は，バウムテストにおいて「実のなる木を1本描いてください」という教示のみでは理解

できず，しばしば実のみ描いたり，「実のなる木」という言葉を書いてしまう場合もみられた。また先行研究においても，小林ら（1983）は，視力障害，利き手の運動障害および重度の痴呆のある者以外の養護老人ホーム入所者，特別養護老人ホーム入所者，老人病院入院患者234名に対してバウムテストを実施した際，「実のなる木を書いてください」という教示に対して，木と認められる絵が描けたのは81名にすぎなかったと述べている。木が描けなかった人の約半数は，木をイメージとして想起できず描けなかったということである。このようにバウムが描けない，教示が理解できないということも被検者の心理特性を理解するに重要な情報ではある。しかし，通常用いられているMMSやN式などといった痴呆評価スケールで知能の程度が測定できない重度の痴呆老人の知能や心理特性をバウムテストで測定することができれば，高齢者の理解につながり，ひいては介護や看護にも役立つと考えられる。そこで開発したのが，バウムテストの「幹・地平線誘導法」である。幹・地平線誘導法の具体的な実施方法としては，A4版画用紙の中心部に長さ120 mmの垂線，垂線の下端に接する長さ120 mmの水平線が補助線として描かれてあるものを利用した。なお，垂線，水平線はともに黒色で，太さ1 mmの実線とし，水平線は垂線によって2等分されており，水平線は画用紙下縁から72 mmの距離に位置する（図1）。また，教示の中で，水平線を地平線として，垂線を幹として描くことを伝えるものとした。具体的な教示は「（下方の水平線を指さしながら）これを地面，（垂線を指しながら）これを幹と見立てて，実のなる木を描いてください。この線は付け足してもかまいません」とした。この幹・地平線誘導法の導入の目的は，通常法では描画を拒否したり，描画の自由度が高すぎて描画できない被検者や，描画しても防衛的である被検者に対して手がかりを与えることで，バウムを描画可能とすることができることにある。この方法は，とくに「実のなる木を描いてください」という教示だけでは理解が乏しい痴呆性老人にとって，幹・地平線を視覚的に誘導するという点で適用できる可能性を持つ。

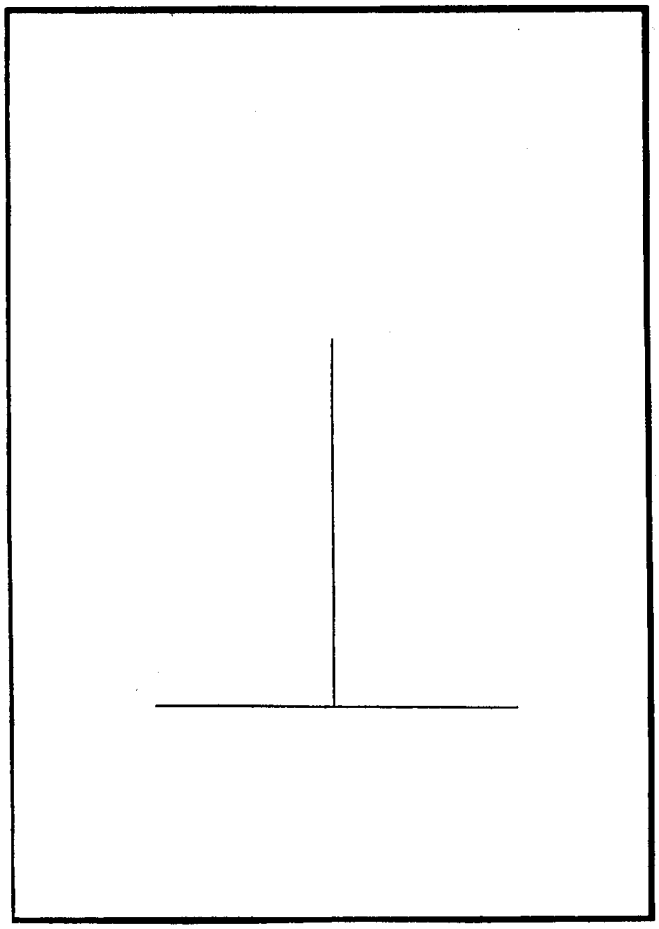

図1　幹・地平線誘導法のバウムテスト用紙

この幹・地平線誘導法を2枚目に，通常法を1枚目に施行することが新しいバウムテストの実施方法である。1枚目の通常法から，空間使用量，使用領域および樹冠と幹の長さといった量的な評価を得，2枚目の幹・地平線誘導法により量的評価に加え，補助線の利用法を検討することにより，質的評価を得ることができる。この通常法，幹・地平線誘導法の2枚法が有用な指標となるならば，これまでは困難であった痴呆性老人，なかでも，より重度の者への適用ができるようになり，痴呆性老人の心理特性をバウムテストを通して理解することが可能となると考えられる。この2枚法は，現在，データを収集中であるが，青年，中年，老年のデータの一部を紹介する（図2）。

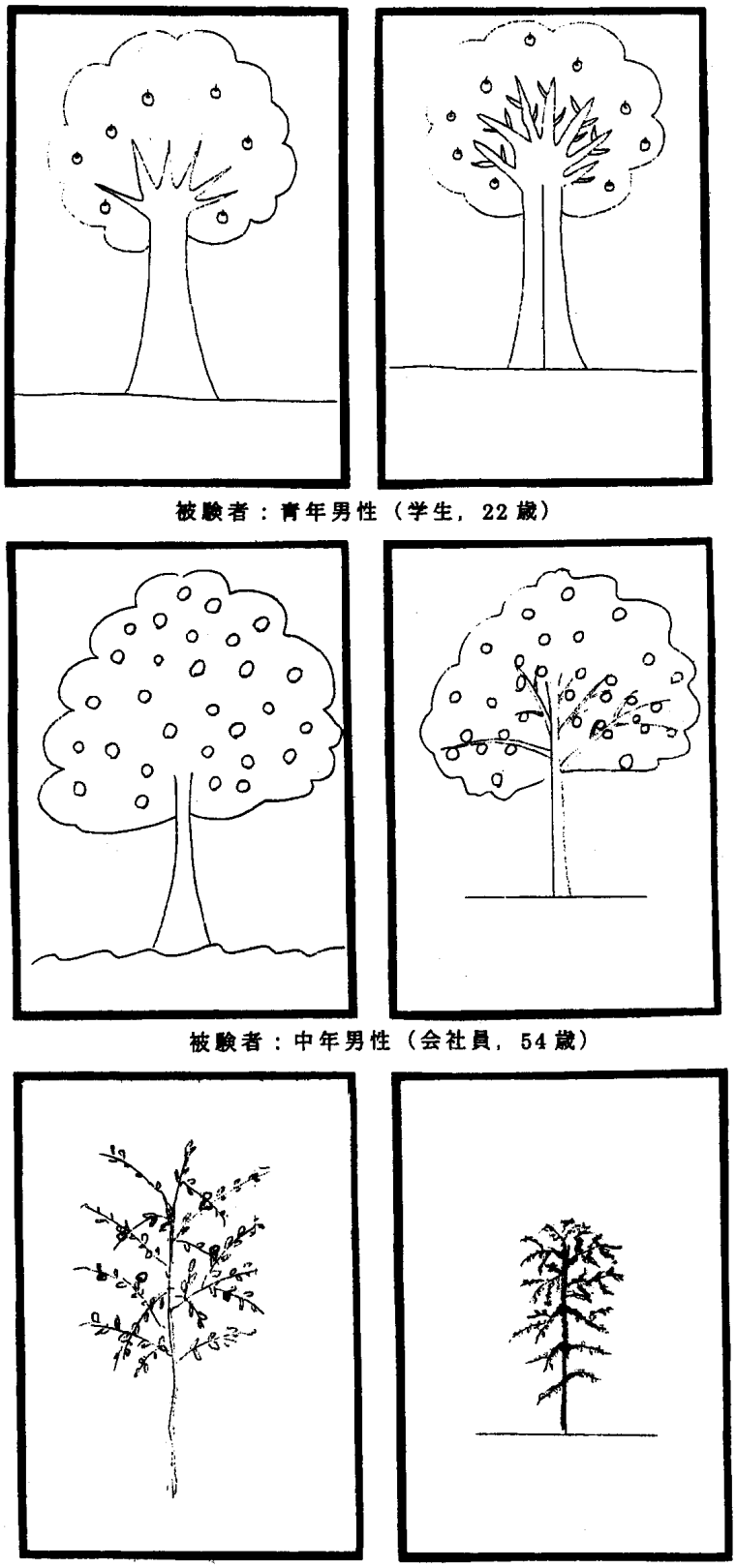

図2　通常法と幹・地平線誘導法によるバウムテスト

お わ り に

本論では，バウムテストの理論的側面についての先行研究を取り上げ，使用状況やテストの信頼性，実施法の検討について述べてきた。バウムテストは，検査対象年齢も幅広く，かつ実施が簡便な心理検査である。それゆえ，より有効に活用するためには，解釈を主観だけに頼らず，解釈の基準に客観性を与えることが重要であるといえる。

また，我々が現在進めている幹・地平線誘導法の実施により，バウムテストは教育，臨床，福祉の現場で，より信頼性の高い検査として利用されるようになると考えられる。

なお，バウムテストは発達，臨床（犯罪を含む）分野でも研究がなされているが，これらについては後の機会に発表する。

参 考 文 献

青木健次　1976　描画法の再検査信頼性—バウム・テストを使って—．心理測定ジャーナル，12，11–16.

青木健次　1977　バウム・テストにおけるバウム・イメージの多様性を測る．心理測定ジャーナル，13，19–23.

青木健次　1980　投影描画法の基礎的研究（第1報)—再検査信頼性—．心理学研究，51，9–17.

青木健次　1981　全体的印象からバウムテストを診る．心理測定ジャーナル，17，2–7.

青木　修　1988　バウムテストの安定性に関する検討．心理測定ジャーナル，24，15–20.

後藤佳珠　1975　臨床場面に適用した“BaumTest”（Ⅰ）新しい技法“Baum-C”“Baum-S”を加えて．芸術療法，6，53–59.

一谷　彊　1974　バウムテストについて（Ⅰ）．心理測定ジャーナル，10，5–12.

一谷　彊・小林敏子・津田浩一・山下真理子・弘田洋二・林　勝造・国吉政一　1987　バウムテストによる生涯的発達研究〔Ⅱ〕—壮年期から老年期にいたるバウムテストの空間利用と加齢の関係—．京都教育大学紀要，Ser. A，71，31–49.

一谷　彊・津田浩一　1982　「バウム・テスト整理表」の作製とその具体的利用．京都教育大学紀要，Ser. A，61，1–22.

一谷　彊・津田浩一・山下真理子・村澤孝子 1985 バウムテストの基礎的研究〔Ⅰ〕—いわゆる「2枚実施法」の検討—．京都教育大学紀要，Ser. A，67，17–30.

石関ちなつ・中村延江・田副真美　1988　バウムテスト・チェックリスト作成の試み．心理測定ジャーナル，24，14–20.

小林敏子・山下真理子　1983　老年期における心理状況について—バウムテストによる検討より—．大阪市立弘済院附属病院研究年報，2，22–56.

松原達哉・江田遵子・荒川優子・細谷和恵・内田賢子　1981　全国児童相談所における心理検査の利用の実態と問題．心理測定ジャーナル，17，9–13.

松原達哉・江田遵子・荒川優子・細谷和恵・内田賢子　1982　全国児童相談所における心理検査の利用の実態と問題（2）．心理測定ジャーナル，17，19–24.

三船直子・倉戸ヨシヤ　1992　バウムテスト2回施行法試論Ⅰ—基礎的調査資料—．大阪市立大学生活科学部紀要，40，313–327.

森谷寛之　1983　枠づけ効果に関する実験的研究—バウム・テストを利用して—．教育心理学研究，31，53–58.

森谷寛之・森　省二・大原　貢　1984　バウム・テストにおける枠づけ効果．心理臨床学研究，1，73–81.

中井久夫　1974　枠づけ法覚え書．芸術療法，5，15–19.

中西真由美　1984　心理臨床家の心理テスト利用の実態．心理測定ジャーナル，20，20–24.

中園正身　1996　一変法としての樹木画法の研究．心理臨床学研究，14，197–206.

佐々木直美・柿木昇治　1999　バウムテストの定量的評価とMMS得点との関係—老人ホーム入所群とデイサービス通所群を対象として—．保健の科学，41，383–387.

佐々木直美・柿木昇治　1998　加齢にともなう心理・生理的機能の変容—バウムテスト，GHQ，要求水準課題および心臓血管系反応を指標として—．心理学研究，69，229–234.

佐々木直美・金河由香・柿木昇治　1998　バウムテストの定量的評価についての基礎的研究—加齢現象と痴呆を対象に—．広島修大論集，38，351–368.

仙田善孝　1980　バウム・テストの信頼性—幼児を対象として—．心理測定ジャーナル，16，14–20.

津田浩一　1976　バウムテストの教示効果について．心理測定ジャーナル，12，5–10.

谷口幸一　1979　パーソナリティに関する一発達的研究—高年者のバウム・テストの分析および知的・情緒的変数との関連について—．社会老年学，11，32–48.

山田麻有美　1978　バウム・テストに関する研究—印象評定を基にして—．心理測定ジャーナル，14，3–6.

山本廣子・武田由美子　1976　幼児期におけるバウム・テストの教示語の理解度．心

理測定ジャーナル，12，11–14.

Summary

Recent Advances in Japanese Baum-test Research

Naomi Sasaki, Eiichi Ogawa, and Shoji Kakigi

Baum-test, a projective tree drawing test that requiring the subject to draw a fruit tree, is meant as a psychodiagnostic tool to test intelligence and personality. This test has been widely used in clinical and educational fields, due to its easier applicability than the other projective tests (e.g., Rorschach test or TAT). Personality assessment through tree drawing in which the relative sizes of trunks and crowns are important, is supposed to discriminate between normal and psychotic personalities. Past research has shown that normal adolescents trend to draw progressively smaller trunks and larger crowns as they grow older, while the trend is reversed in older subjects.

There have been many studies in estimating the Baum-test in quantitative and qualitative ways. Above all, "double drawing method of Baum-test" showing that the second drawing reflects more real reflection than the first one, and "fence technique" showing that the therapist made a fence on the sheet beforehand, have been reviewed in the present paper. In addition, we have developed a new estimating technique, so-called an S-Baum, Shudo-Baume test technique and have reviewed its potential.